



山下泰裕さん(51)

1980年モスクワ大会男子柔道「幻の代表」
84年ロサンゼルス大会金メダリスト

オリンピアン 採訪

(採訪は中国語でインタビューの意味)

(ロサンゼルス五輪での試合は) 鬼のような形相をしていたんじゃないかな。(2回戦で負った) 軸足の右足肉離れで技が仕掛けられない中、準決勝で(先に「効果」を取られた時には)一瞬、駄目かなと思った。でも、けがに負けるか。この大舞台で、ぶざまな試合をするために頑張ってきたわけじゃない」との思いがこみ上げた。苦しかったから、表彰台の真ん中に立った時は「世界で一番幸せだ」と思った。

◆熊本県出身。東海

大相模高から東海大に進み、77年の全日本選手権を史上最年少の19歳で制した。84年ロサンゼルス大会無差別級で金メダルを獲得。しかし、23歳で迎えるはずだった80年モスクワ大会は、ソ連のアフガ

式戦203連勝。無類の強さを誇った。それだけ勝ち続けるかより、(柔道の) 中身だと思っていた。過去は関係なく「次の試合、これからの試合」と理想を求め、「今は道半ば」と思って山を登り続けている。

柔道連盟男子強化部長などを歴任。昨年までは国際柔道連盟(IJF)理事も務めた。「最強」ではなく、「最高の選手を育てたい。勝ち負けだけでなく、人間性も磨き上げた選手。あいさつや感謝の気

「人間も高めなくてはいいじゃない」という考えにたどり着いたのだから、選手たちにも伝わるはずだ。

選手を犠牲にするな

二スタン軍事介入への抗議目的で日本は選手団を派遣しなかった。五輪もスポーツも「感動を伝える」という社会への影響が増すほど、政治とのかわりは避けて通れない。しかし、ポイント選手を犠牲にした安易な手法だろう。ロ

する) 本当の力がなかった。五輪が4年に1度ではなく、一生に1度の選手も多い。若い選手に二度と同じ思いをさせたくない。

◆全日本選手権9連覇(85年まで)。世界選手権3連覇。77年から引退する85年まで公

た。引退して初めて振り返ってみて「こんなに山に登ったのか」と感じた。前を向き続けた秘訣(ひけつ)かもしれない。

◆東海大の柔道部監督や96年アトランタ、00年シドニー両大会の男子代表監督、全日本が成長し、柔道を通じて

持ちを持つという基本的なことができていくことが大事だ。選手は自分一人ではなく、多くの人が支えられて成長する。「最高の選手を育てようとする」とは間違いない。成長があるはずだ。【聞き手・吉見裕都、写真も】